

春来る鬼

須知徳平

鬼 須知徳平



春来る鬼

昭和38年2月28日第1刷

昭和38年5月7日第2刷

定価 300 円

著者・須知徳平

装画者・初山滋

発行者・高木金之助

印刷・製本・中央精版印刷株式会社

発行所・毎日新聞社

東京都千代田区有楽町1～11

大阪市北区堂島上2～36

北九州市門司区清滝町1～902

名古屋市中村区堀内町4～1

〈検印省略〉

乱丁・落丁本はおとり替えます。

目次

春来る鬼

五

三陸津波

九

南部牛方節

一四

あとがき

一〇三

藝
圖

初
山

滋

春
来
る
鬼

ためし入り

三陸の海辺に住いる海人^{あま}たちが、沖合を南下する冷たい海流を、その、くさぐさの獲^えものをもたしてくれる恵みと、時には又、その、底に秘めた計り知れぬ怒りを畏れて、「親」と呼び慣わすようになったのは、いつ頃からのことであらうか。

この、親潮と黒潮——正眼^{まさめ}にも果しない黒い流れの——と出会うあたり、海辺にそば立つ西の山並を、いかつい肩にして、海上に突出した左腕が、その先端を荒浪にえぐられて、鳥の嘴のようにとんがった、黒い岬があった。沖合に舟出する海人たちは、鬼の岬と呼んでいたが、そう言え、外海から眺めると、浪間に半ば頭を没した、巨大な鬼の角のように見られなくもなかった。

潮も風も雲も、未だ神の属性を失わず、その人格性を奪われることなく、人々の、きわめて身近な存在として、生きていた頃のことである。

東の空と、だだっ広い水際との落ち合うあたりが、白明によどんできた夜明方、この岬の突端に立って、ひよる長い体を、潮風になぶられながら、昨夜の激しい時化^{しけ}のなごりを、まだ身内一

ばいにふるわせていたひとりの男が、突然、息をのみ込むようにして、眼下の一点を凝視した。ごうごうと、岩を噛んでのたうちまわる、うす墨色の浪間に、浮き沈みする、黒い影を見つけたのである。

水際のにぶい光が、急速に、うす墨をとかしはじめると、男は、怖れとも喜びともつかぬ叫び声をあげて、岬の元の方へ、よたよたと走り出した。

「ゴロウがお出^でったぞォ——ゴロウが流れてお出^でったぞォ——」

×

舟底板にしばらくつけていた麻綱が、ずたずたに切りほどかれた。抱き合った二つの体は、乱暴に引離されると、砂辺に、鯢^{とと}のように投げ出された。

二人とも、ほとんど丸裸だった。全身赤銅色に焼けた、ゴロウのくせして、股間のふんどしが大きく盛上った、たくましい男と、もう一人は、塩水に濡れた陰毛^{はとげ}が、下腹の半ばまで、べったりとはい上り、太股も腹も、胸も、すき透るような白い肌の、若い女だった。

まわりにより固った、幾十もの貪欲な眼差の間から、突然声がおこった。

「——こりゃ、ゴロウでねえぞ……」

女の、豊かな乳房の下に、痛々しく食込んだ二筋の綱目の跡に、うつすらと、血が浮んできたのである。

まわりのざわめきが、次第に荒くなった。

「手出しをするでねえ——」

きびしい声がとんだ。髭面ひげづらの年寄りが、かがみ込んで、節くれだった手を、二人の胸に当てた。

「水を持って来い——」

口がこじ開けられて、運ばれた土がめの真水が、顔にぶっかけられた。髭面は、尙も、思案するふうに、男の臉を開けてみたり、濡れた乳房に耳を当てがったりしていたが、

「一先ず、おれの小屋さつれてゆけ」

と、きびしい声で命じた。

やがて、二人の体は、さかさまにかつがれて、山際の、切株根きつぐねに囲まれた、海人小屋に連れてゆかれた。

「お前らは、どこの者だ」

炬火たきびに温くまされて、やっと正気づいた時、髭面は、最初にこうきいた。男は、まだ喉の底が、塩辛くつかえるのか、しゃがれ声で、

「北の浜の者でがんす」と答えた。

北の浜ときいて髭面が、急に硬くなった。

「お前の名は」

「さぶろうし……」

漁師は、一人前になると、呼名をつけられるならわしがあった。始終、耳をつんざく荒浪の上で仕事をするのだから、わかりやすい通り名が必要だった。顔形、体つき、性格、くせ、働き具合など、さまざまな要素が、呼名のもとになった。

さぶろうし、というのは、魴^{はうばう}鮓に似た、それよりも一まわり大きな、深海魚の一種である。そう言えば、この男の、がっしりした四角い顔形も、赤銅色の肌合も、どこか、さぶろうしを思わせるところがあつた。それとも、さぶろうしが棲んでいる深海にも、もぐることができるまで、息がつづく男だからだろうか。

髭面が、やっとほころんだ。

「おなごは」

「ゆの……」

傍の女が、蒼い顔を上げた。

うす汚ない海人小屋だった。炉辺には、食い残しの魚の骨や、器ものが散らばっている。他に誰もいない。髭面のひとり住いらしかった。土間の横木には、延縄や、突ン棒が、一ぱい立かけてある。突ン棒の穂先は、鋭くみがかれていた。それだけは、さぶろうしの眼にもわかった。この髭面は、漁にかけてはただ者ではない。

表戸が開いた。

「くつくねの爺^{とうや}や、頭屋^{とうや}さんが呼んでなさるど」

背の、やけにひよる長い男だった。うしろから、幾人ものこり固った眼が、押し合いへし合いして、中をのぞいていた。ゆのは、髭面がひっかけてくれた腰びりの襟を合せて、乳房をちぢこめた。

「わかったじゃ、のっぺ——戸を閉めて帰れ」

髭面は、炬火の又木につるした、土鍋の裨がゆをかきまわした。ゆげのにおいが、空っ腹を刺した。二人は、もう二日も、何も食っていないかった。

さぶろうしとゆのが、さっぱ舟に乗って、北の浜を逃げ出したのは、たしか三日前の真夜中だった。時化に会った。糧も食物も着物も、浪にさらわれてしまった。さっぱ舟も、隠れ岩にぶち割られてしまった。舟底板をはずして、体をしぼりつけた。もう助からねえと覚悟した……。

「ここは、どこの浜でがんすべ」

「お前ら、知らねかったのか」

髭面はもう一度、念を押すようにきき返した。

「本当に、知らねえで流れてきたのか」

「へえ——」

本当に知らなかったのだ。喉の底がひからびて、耳の奥がざわざわなった。気がついたら、この板間にねかされていたのだ。

「ここは、岬の浜だ——」

「岬というと、——鬼の岬のこつてがんすか」

と、思わずきき返した。

ゆのは、ふるえながら、さぶろうしに、にじり寄った。

二人は、何も鬼の岬を指して逃げてきたのではなかった。そんなことを思いつく筈がなかった。北の浜の者らは、昔から、鬼の岬に近づくことを怖れている。第一、岬の裏側に、こんな入江があるとは、きいたこともなかったし、まして、部落があるなぞとは、思ってもみなかった。「あとで、お前らを、頭屋のどこさ連れてゆかねばならねえ。それまで腹ごしらえをしておけ」又木から土鍋が下ろされた。さぶろうしとゆのは、餓鬼のようにむしゃぶりついた。

「お前らは、運のええ奴だ。よく殺されねがったもんだ」

髭面が、ひとり言のように呟いた。

砂粒だらけの裨がゆが、喉の底にひっかかった。

×

くつくねの爺イは、一足先に、頭屋屋敷に出かけていった。

さぶろうしとゆのは、のっぺに連れられて、表に出た。

いつの間にか、日射しは中空にくるめいていて、真向の岬の陰を、入江の海に、大きく落していた。

夜明方、この岬の沖で、荒浪に漂っていたさぶろうしとゆのをみつけたのは、その夜、ジャコ

ミ（魚見）番に当たっていた、この背高男の、のっぺだった。のっぺの知らせで、舟子頭のくつくねの爺イが、舟を出したのだ。

「お前らが、ゴロウでねがったもので、おらひでえ目に会ってよ」と、歩きながら、のっぺが呟いた。

「そりゃ、何のこった」

「いや、何でもねえ……」

あわてて、長い首をすくめて、

「頭屋敷は、こっちの方だがや」

岬よりの、くつくねの小屋から、右手に、山際伝いの道をゆくと、軒を接した幾十もの海人小屋が立並んでいた。途々、海人小屋の戸が開けられて、村人らが、後から、ぞろぞろついてきた。

——ゴロウのなり損いだ。

——他所者だ。

顔を寄せて、口々にささやき合い、まるで仕置場に連れてゆかれる罪人を送るような、眼付だった。

「何も気にすることはねえ、頭屋さんの調べがすむまでは、誰も手出しは出来ねえからなや」と、のっぺが言ったが、家を出る前の、くつくねといい、のっぺといい、気にかかる言葉だった。

た。

軒並の海人小屋を通り過ぎると、西の山の谷間に沿って、石ころだらけの坂道にかかった。村人らは、どこまでもついてくる。

坂道を登りつめると、山腹の高台になった。

一面に赤松の林が拓けて、その中に、頭屋屋敷があった。根太の高い、砦とりでのような古い造りで、軒廂びしが、さっぱ舟をかくすほど深く、土台石や、屋根石には、青苔までむしている。途中の海人小屋が、うす汚ないけもの小屋みたいなものばかりだったので、こんなところに、こんな豪勢な屋敷があるとは、思いがけなかった。

「ここに坐って待ってろや」

さぶろうしとゆのは、湿っぱい土間の上に坐らせられた。うしろからついてきた村人らは、てんでにあらをかいいたり、立膝をしたり、二人のまわりを、ぐるっと、とりまいた。

松林と、深い軒廂に、日射しはさえぎられ、屋敷の中は、がらんとしてうす暗かった。土間から、半間程の高さの板間の上に、五枚の丸莫莖むぎが敷かれてあった。その奥は、三方厚い板襖おすまでしきられている。うしろの、村人らのざわめきがするだけで、屋敷内は、物音一つしなかった。さぶろうしは、眼をつむった。調べということだが、これから一体、何を調べられるのか、不吉な予感が、冷たく、背すじを走ってきた。

うしろのざわめきが、急に止まった。眼を開いた。正面の襖戸が、音もなく開いて、しきい

一杯、五人の人影が現われた。真中が頭屋だった。未だ秋も半ばというのに、足にひきずるような厚司あつしを、肩にひっかけて、頬あこから頤あこから、松藻まつものような髭に覆われたどす黒い顔の、落ちくばんだ二つの眼だけが、異様に赤く光っている。土間の二人を射すくめるように見下すと、厚司の裾をはねのけて、真中の丸莢えん座にあぐらをかいた。

「頭屋さま、北の浜の者らでがんす」

くつくねの爺おやイの声で、さぶろうしとゆのは、土間に両手をついて、腰をかがめた。頭屋は、何も言わなかった。うなずきさえしなかった。

頭屋の右側に、白髪あかのばんば（婆）が坐った。垢あかじみた白布子しらぬのこを身にまとい、首に、白骨を連らねた輪玉を下げて、膝まで垂らしている。部落の口寄せばんばであった。まじないごとをしたり、頭屋のフレを告げ歩いたり、村人から、こばしり（口走り）のばんば、と呼ばれている。

右側に、くつくねの爺おやイが坐った。つづいて、両耳たぶのでかい、かっかべ（蝶々）、横広、赤面のがんに（蟹）が坐った。この四人が、部落の名代衆であった。

「これから、この他所者らの、調べをはじめやす」

再び、くつくねの爺おやイの告げで、それから、さぶろうしとゆのは、名代衆に、次々に調べられた。気が遠くなるような、長い時間だった。

——名前は何という。年はなんぼだ。

——北の浜で、お前の仕事役は何だ。

——この岬の浜に流れてきたのは、どういう魂胆だ。

——どこを、どうやって、北の浜から流れてきたのだ。

——そのおなごは、一体お前の何だ。

真中の頭屋だけが、始終無言だった。

「お前らは、なじよなわけで、北の浜を逃げて来たんだ」

と、きかれた時、さぶろうしは、もう何もかもぶちまけてやれ、と思った。どうせ、すんでにゴロウになるところを、助けられた生命だ。ゆのにはすまねえと思うが、嘔吐いたところで、どうなるもんでもねえ——。

さぶろうしとゆのは、好き連れだった。ゆのは、北の浜の老名のひとり娘だったし、さぶろうしは、貧しいひとり身の海人だった。身分の違うこの二人が、どうして好き連れなどになってしまったのか。

さぶろうしは、村の若者達の中では、誰にも負けない腕立ちの漁師だったが、ろくな係累もないひとり者が、老名屋敷の婿に招ばれることなど、万々一にもなかった。

二人は人目を怖れ、森の奥に、或は浜辺の岩陰に、火のような情熱で相手を求め合った。

こんな虫けらのような暗い逢う瀬が、いつまでつづくというのであろう。

つい先だったことである。ゆのに、隣村の物持ちから、婿が来るという噂をきいて、腸がにえくり返った。ゆのは女だ。いくら好き連れだといったって、このままでいたら、阿父の老名の